

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381034

研究課題名(和文) 授業評価の深化からアウトカム保証へとつなげる授業システムの構築に関する実証的研究

研究課題名(英文) A research for an educational system using class evaluation to ensure students' learning outcomes

研究代表者

劉 卿美 (YOU, Kyonmi)

長崎大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：00346941

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：大学は、国際社会で活躍することができる人材の育成という任務を担っています。この課題解決のためには、各大学が掲げる教育理念や到達目標をいかに確実に達成していくこと、学生たちが大学の教育理念や到達目標を意識しながら授業に参加し、主体的に学修に取り組むことが不可欠です。本研究では、授業を、大学の教育理念や到達目標を保証する、教員と学生の協働の場ととらえ、そして授業評価を、その協働の場を支える、教員と学生のコミュニケーション・ツールとして活用しました。各研究分担者は、3年間の研究期間を通して、学生による授業評価を分析し、教員との協働の場が形成される授業の展開を試みました。

研究成果の概要(英文)：With the rapid globalization, there has been an urgent demand for globally talented human resource. This is because that Japanese universities are asked to make an effort to ensure students' learning outcome. In order to materialize this learning outcome it is indispensable that students participate in their classes actively and engage in their own learning. The researchers considered classes as a platform to collaborate with teachers and students. In addition, class evaluations are thought as a communication tool to support this platform. For the past three years, the researchers have conducted a class evaluation of their individual classes, analyzing the data. Based on the result, they tried to clarify the efficient way to build collaborative classes in which teachers and students work together to achieve learning outcomes.

研究分野：教育学

キーワード：授業評価 アウトカム アセスメント 質保証

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は、次の三段階で説明することができる。(1) 学生による授業評価の実施と定着(平成14~18年)、(2) 学生が納得して参加する授業の模索(平成18~23年)、(3) 卒業時のアウトカムの保証(平成23年~)である。近年、学生が、掲げられた教育目標をいかに達成し、それを視覚化するかということが、大学教育の新しい課題となった。そこで、初心に立ち返り、今までに蓄積した授業評価データを改めて分析し、成績等との関連を調査することによって、学生による授業評価を深化させ、教員と学生の信頼をさらに深め、目標達成に向けた教員と学生の協働の場となる授業が構築できたならば、新しい課題の解決が図れるのではないかと考えた。これが本科研申請の背景である。

2. 研究の目的

社会の国際化が急速に進む中、大学は、国際社会で活躍することができる人材の育成という課題を背負うことになった。この課題解決の最も基本的な一歩は、各大学が掲げるディプロマポリシーをいかに確実に達成していくかである。そして、この達成にあたっては、学生たちが主体的に学修に取り組み、そのアウトカムを高めていく必要がある。このためには彼らが到達目標を意識しながら授業に参加することが不可欠となる。この基盤には教員と学生たちの信頼関係がなくてはならない。これを形成するために、学生による授業評価のあり方を見直し、教員との協働の場が形成される授業が展開されなければならない。授業評価を教員とのコミュニケーションツールとして深化させ、アウトカムを保証する協働の場としての授業をどのように組み立てていくかを追究するものである。

3. 研究の方法

(1) 学生による授業評価結果の分析

(2) 授業評価やアウトカム保証に関する先進大学の調査

(3) 研究代表者・分担者が事前・途中・事後を含む学生による授業評価を行うとともに、学生とのコミュニケーションを密にした授業を行い、学生たちの目標達成や主体的学修態度形成に向けた要因を探る。

特に1年目においては、分析と調査を重視し、本研究の目標達成に必要な評価項目や授業評価方法を明らかにした。2年目は、分析・調査の補足も行うが、1年目と2年目で実施した授業評価の結果を使って、さらに分析を進めた。そして、アウトカムの保証につながる授業評価のあり方やそれを用いた授業システムを確立させたいことを目指した。またこの両者を別々に行うのではなく、(1)の分析状況は即座に(2)のメンバーにも伝え、(2)のグループは順次明らかになっていく分析を踏まえて調査項目を考えることにした。

4. 研究成果

(1) 研究代表者は、「韓国語」の授業で、毎時の授業評価をもとに授業改善を行なうとともに、成績評価を通して学修成果の可視化を試みた。大学が各学期末に一斉に行なう学生による授業評価を通して、学生が授業に対して、どのような印象を持っているかを把握した。ただ、授業の変化が評点に大きく影響するわけではなく、授業改善の即効薬にはなりにくい。そこで授業改善のツールとして、毎時、コミュニケーション・カードによる授業評価を取り入れた。それによって、学生の意見を反映することができ、満足度の高い授業を実現することができた。授業評価を教員とのコミュニケーションツールとして進化させ、教員と学生の信頼をさらに深めるためには、授業評価の回数を増やし、蓄積した授業評価データを継続的に分析することが不可欠であることがいえる。

(2) 教育の質保証の前提となる授業改善は、一人の教員の試みを積み重ねることによって生まれることが多い。その意味では改善の根拠となるデータは、一人一人の教員の身近な存在でなければならず、その分析も一人の教員が手軽に行えることが不可欠である。研究分担者は、「人間学」という授業を行いながら、第一回目と第二回目、そして第四回目にクリッカーを活用して学生の心境などについて反応を見た。クリッカーの使用は学生の人気は高く毎回でも使用して欲しいとのコメントも寄せられた。これは予想外であった。記名式でなく、また、気軽に反応できることや友人たちと会話をしながら回答できるのが人気の源のようである。だから、このクリッカーの使用後は、クラスの雰囲気が和やかになり、こちらからの問いかけにも素直に応じるようになった。大人数での授業の活性化に向けたヒントを得た。この中で入手したデータの分析を行うことによって、受講生の状況把握が可能になった。受講生の協力によって集めた各種のデータを授業改善に役立てるのは、従来の学校教育で一人の教員が無意識のうちに行ってきた方法に似ているが、教員の勘ではなく、データの活用という視点を大切にする。また、これによって、大きなデータを駆使せずとも、授業中のデータを活用することによって、毎回のように授業改善を試みることができた。

(3) 研究分担者は、2010年度より導入した新規カリキュラムが学生によってどう評価されているか、またそのアウトカム保証がどの程度の実効性を示したか、それらを知るためにメジャー制度1期生の卒業年次におけるインタビュー調査を実施した。学生へのインタビュー調査はその後、新入生へのインタビュー調査として継続しており、合計143名から実施している。インタビュー調査結果はFD、SD研修にも活用し、全学的な共有化を図ることで、授業評価からアウトカム保証へとつなげる授業システムの構築を図ること

とができた。

(4) 研究分担者が所属する大学では、平成24年度より教養教育カリキュラムを刷新された。2年次前期開講科目に焦点を絞り、学生による授業評価と、教員による授業総括の結果をもとに、新規カリキュラムに対する評価を試みた。そこで次のような結果が得られた。①「学生による授業評価」と教員の授業総括との間には正相関がある。②「学生による授業評価」とクラスサイズとの間には負相関がある。③成績は「学生による授業評価」とも教員の授業総括とも相関がない。④成績、「学生による授業評価」、教員の授業総括はいずれも年度差がない。経年比較を視野に入れた教育改革のモニタリングは不可欠な作業であり、学生や教員の生の声をとらえた質的な状況理解も並行させながら、より詳細な評価方略を練る必要があるといえる。

(5) 研究分担者は、「書道科教育」の授業を通じて、受講者に育成された「書を愛好する心情」に関して検討した。方法としては、平成27年度前期「書道科教育」の受講者に、受講前と比較して、どのような意識や行動に変化が起こったかを自由記述させた。その中から、「書を愛好する心情」のきざしを拾った。その裏付けとして、試みに、書道理論系科目の成績評価及び書道実技系科目の成績評価を参照した。この研究により、受講者の質的な評価が必要であるということがわかった。具体的には、以下のような方法を提案した。①第1回と第15回とで、同一の問いに対して、自由記述させる。それを比較し、受講者の変容を探る。②同時期に、前項①の問いを、「書道科教育」を受講していない学生にも、回答させる。こちらも、前項①と同様に、第1回と第15回との記述を比較する。③前項①と前項②の違いを比較する。そのことで、「書道科教育」受講者の変容を考究する。④「書道科教育」を受講した学生に関しては、他の「書道」科目の授業担当者と連携して、関心態度及び成績等の追跡を行う。つまり、「書道科教育」受講前後の履修状態を資料化しておく⑤「書道科教育」受講後、半年及び1年の時点で、下記の問いに対して、自由記述させる。

(6) 研究分担者は「脳とことば」の授業で、第15回の授業終了時に授業評価を行った。なお、第8回目の授業終了後に中間評価を行った。年度内及び年度間の比較を行い、その変化について授業内での取り組みの違いに焦点をあてて分析した。このような授業評価から得られた示唆の一つは、集中講義という形式であるがゆえに、講義の間の空白を、いかに維持していくかが重要であることであった。また、アクティブ・ラーニングの効果が、授業評価に反映されうることも示された。さらに、本授業評価結果との直接的な関係は明らかではないものの、学生と教員の相互作用がどれくらい取れているかを何らかの形で確認する手段を講じる必要性も浮き彫り

になった。

(7) 研究分担者は、「教育得評価の基礎」という授業で、毎回、「Portfolio」という名称のミニツツペーパーを授業終了に行うと共に、試験を最終回の授業の1回前に実施し、最終回に試験を返却すると共に、100項目程度の最終アンケートを実施した。3年間の研究により、授業アンケート活用のポイントが明確になった。①授業アンケート結果を見る際に、往々にして、「総合的満足度」などの総括的な項目の評定平均値によって、授業の良し悪しを判断することが見られるが、満足度等の感覚は、多くの要因が関与していることから、授業アンケートには、多面的な項目を含めて、それらを総合して授業の振り返りに活用すべきである。②個別授業直後の授業アンケートの評定平均値は、その方法や内容によってかなり大きく変動するが、学期末の総括的授業アンケートでは、比較的安定した評定平均値を示した。③毎回授業の学生の反応を次週にフィードバックし、その結果を受講生全体で共有するといったこと、また、学期末の試験の結果をフィードバックするといったことは、授業アンケートなどから学生から高い評価が得られている。授業から得られた知識を深い学習につながっていくことが望まれているが、その際に、授業での教員と学生とのネットワークが形成されていれば、誘引しやすくなる。その意味で、フィードバックを伴う評価機会を、授業の中で作っていくということは、大学の授業でもっとチャレンジされていいことではないかと思われる。④授業の振り返りのツールとして、試験と授業アンケート、いわゆる、直接的な評価と間接的な評価を的確に関連づけながら、その両者の結果について解釈を深めていくことが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ①橋本健夫、谷ロ一也、小学校理科におけるがん教育教材に関する一考察、関西国際大学研究紀要、査読無、17巻、2016、109-117
- ②劉卿美、橋本優花里、川越明日香、橋本健夫、米国大学におけるラーニング・コミュニティおよびティーチング・コミュニティ、長崎大学イノベーションセンター紀要、査読無、7巻、2016年、25-33
- ③山地弘起、劉卿美、橋本優花里、川越明日香、橋本健夫、米国における学修成果の評価—エバグリーン州立大学・ポートランド州立大学・アパラチア州立大学・クレムソン大学の事例から—、長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要、査読無、6号、2015、21-36
- ④山地弘起、劉卿美、橋本健夫、米国における大学教員の教育活動評価—カリフォルニ

ア州 3 大学の事例からー、長崎大学大学教育
イノベーションセンター紀要、査読無、5 号、
2014、13-18

⑤橋本優花里、川人潤子、山崎理央、青野篤
子、ピア・サポート・トレーナー養成講座の
発展ー2 年目の取り組みと今後の課題ー、福
山大学人間文化学部紀要、査読無、14 卷、2014、
121-136

⑥大塚雄作、FD ネットワークの実践と課題、
IDE 現代の高等教育、査読無、559 卷、2014、
26-31

⑦内山弘美、杉本孝作、細川敏幸、小暮克哉、
丸山和昭、リベラルアーツ教育における環
境・生命・安全・防災をテーマとした教育、
大学教育学会誌、査読無、36 卷 2 号、2014、
70-73

〔学会発表〕(計 5 件)

①劉卿美、橋本健夫、コミュニケーション・
カードを用いた授業改善(2)、日本高等教
育学会、2015 年 6 月 27 日~2015 年 6 月 28
日、早稲田大学(東京都新宿区)

②劉卿美、橋本健夫、韓国における学校教育
改革ー自由学期制の導入のねらいと課題ー、
日本生活科・総合的学習教育学会、2015 年 6
月 20 日~2015 年 6 月 21 日、福岡教育大学
附属若菜高等学校(福岡県福岡市)

③劉卿美、橋本健夫、韓国の学校教育におけ
る創意的体験活動、日本生活科・総合的学習
教育学会、2014 年 6 月 14 日~2014 年 6 月
15 日、埼玉大学教育学部附属小学校さいたま
市立仲町小学校(埼玉県埼玉市)

④橋本健夫、劉卿美、川越明日香、初習外国
語の授業改善に向けた教育 IR の活用(1)、
大学教育学会、2014 年 5 月 31 日~2014 年 6
月 1 日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

⑤内山弘美、杉本孝作、細川敏幸、小暮克哉、
丸山和昭、リベラルアーツ教育における環
境・生命・安全・防災をテーマとした教育、
大学教育学会、2014 年 5 月 31 日~2014 年 6
月 1 日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

〔図書〕(計 1 件)

①鈴木慶子、東信堂、文字を手書きさせる教
育ー「書写」に何ができるのか、2015、246

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

劉 卿美 (YOU、Kyonmi)
長崎大学・言語教育研究センター・教授
研究者番号：00346941

(2) 研究分担者

橋本 健夫 (HASHIMOTO、Tateo)
関西国際大学・教育学部・教授
研究者番号：00112368

杉本 孝作 (SUGIMOTO、Kosaku)
四国学院大学・文学部・教授
研究者番号：30154488

大塚 雄作 (OTSUKA、Yusaku)
独立行政法人大学入試センター・教授
研究者番号：00160549

山地 弘起 (YAMAJI、Hiroki)
長崎大学・大学教育イノベーションセン
ター・教授
研究者番号：10220360

鈴木 慶子 (SUZUKI、Keiko)
長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：40264189

橋本 優花里 (HASHIMOTO、Yukari)
福山大学・人間文化学部・教授
研究者番号：70346469